

歴史災害の研究成果と公刊と新しい取り組みプロジェクト

プロジェクト代表者： 文学部・教授 吉越 昭久

共同研究者： 大窪 健之、小川 圭一、片平 博文、河角 龍典、谷口 仁士、山崎 有恒

【研究計画の概要】

歴史都市における文化遺産防災研究にとって、その地域における歴史災害を把握しておくことが極めて重要であることは、これまでの研究から判明している。それにもかかわらず、この分野に関する学会などにおける認知度は低く、多くの学術雑誌への発表機会が少ないのも事実である。このような状況にある中で、立命館大学歴史都市防災研究センター(2012年度まで)が刊行してきた『京都歴史災害研究』は昨年度までに第14号に達し、この分野における高いレベルの学術雑誌として評価を受けてきた。

昨年度末をもって文部科学省グローバル COE プログラムが終了したために、今年度からは奨学寄付金を原資としてその刊行を継続することとしたい。そこでは『京都歴史災害研究』の継続的な刊行だけにとどまらず、可能な限り掲載論文のレベルをあげる試みをしてみたい。具体的には、第一にその論文の査読をこれまで以上に厳格に行うことである。第二に、歴史学的な研究成果の掲載だけに終わらせるのではなく、その結果を工学的な分野からも検証するような研究も今後加えるようにすることである。それが可能になれば、歴史都市における文化遺産防災研究に大きく寄与することになると考える。そのような新しい試みの論文だけでなく、貴重な未公開史料の紹介や、年表などのデータベース化、GIS を用いた地図表現などの分野の研究も積極的に掲載していくことはいうまでもない。

【研究成果】

I. 研究成果の概要

歴史都市における文化遺産防災研究にとって、その地域における歴史災害を把握しておくことが極めて重要であることは、これまでの10年にわたる COE プログラムにおける研究から明らかになっている。しかしこの分野は、学会だけでなく社会全般でも認知度が低く、学術雑誌への発表機会も少ないもの事実であった。このような状況を踏まえて、立命館大学歴史都市防災研究センター(2012年度まで)では、『京都歴史災害研究』刊行し、その機会を提供してきた。同誌の刊行は、2012年度までで第14号に達し、この分野における高いレベルの学術雑誌として評価を受けてきた。これまでの総頁数は1,150頁を越え、内容としては論文39点、短報14点、その他10点である。特に、その他の中には「京都災害年表」、「大正期京都歴史災害データベース」、「歴史災害文献目録」など極めて貴重な資料の公開も行われてきたことが特徴である。

2012年度末をもって、グローバル COE プログラムが終了したため、今年度からは奨学寄付金を原資としてその刊行を継続することとなった。予算状況の厳しい中、なんとか刊行を継続することが可能になり、若干遅れ気味であったが9月になってこのことを歴史都市防災研究所のホー

ムページで公表した。

本プロジェクトの当初の計画は、『京都歴史災害研究』の継続的な刊行だけにとどまらず、可能な限り掲載論文のレベルをあげる試みをするにもあった。具体的には、第一にその論文の査読をこれまで以上に厳格に行うことであった。第二に、歴史学的な研究成果の掲載だけに終わらせるのではなく、その結果を工学的な分野からも検証するような研究も今後加えるようにすることもあった。このような新しい試みの論文だけでなく、貴重な未公開史料の紹介や、年表などのデータベース化、GIS を用いた地図表現などの分野の研究も積極的に掲載していくことも本プログラムの目的であった。

II. 研究成果の詳細

まず、歴史災害に関する継続的な学術雑誌の刊行であるが、現在、『京都歴史災害研究』第 15 号の編集作業が行われている。これについては 2014 年の 3 月中には刊行される予定である。今回は本誌の継続刊行の公表が遅れたこともあって、十分に広報が行き届かなかったためか、投稿点数も多いとはいえない。論文が 2 点、短報が 3 点の計 5 点で刊行の予定である。

なお、本誌の編集作業がかなり進んだ後だったために、本誌の中に含めることはできなかったが、本プロジェクトの共同研究者である山崎有恒が、新聞データベースの成果をまとめている。これは、別途、報告書として刊行されることとなったが、本来であれば『京都歴史災害研究』第 15 号に掲載されるべきもので、それも含めればかなりの成果になったことは疑いがない。

第一の計画として、これまで以上に厳格な査読を行い、論文のレベルをあげることがあった。これについては、歴史都市防災研究所の構成メンバー(客員研究員も含む)から最も適任と考えられる 2 名によって査読を行い、その結果を著者に返して修正を求めた。その修正要求にそって修正が行われたものについて、掲載を受理することとした。これで、かなり論文の内容や表現が信頼されるものとなった。

第二の計画に関しては、現在の段階では、十分な成果をあげるところまでは至っていない。しかし、今回の報告書の第二部会の部分で触れているように、歴史学的な研究成果の掲載だけに終わらせるのではなく、その結果を工学的な分野からも検証するような研究も今後加えるようにするという意図は、様々な機会に公表しており、近いうちに実現するものと考えている。これこそ、文理融合の成果として最も期待されるものではないかと考えている。

具体的な今年度の成果の一例として、過去の津波災害をしのいできた社寺が、東日本大震災の際にも避難所として地域の避難生活を支えた事例について実態調査を行い、その将来への応用可能性について検討を行った。この成果は「津波避難拠点として機能した社寺」として、『東北学』03(はる書房、2014 年 3 月刊行予定)の特集記事に掲載される予定である。

なお、『京都歴史災害研究』は、これまで定期的に送付している研究機関・行政機関などに継続して送ることとしたいが、歴史都市防災研究所のホームページにおいても公開されるので、多くのアプローチが期待できる。

Ⅲ. 今後の研究計画・展開

今後とも、歴史災害に関する高いレベルの研究成果を掲載していくことと、前述のような課題とされた工学的な分野からの検証を実現するようなことが必要とされる。しかし、後者については、積極的な仕掛けをしないと実現は難しいと考えられるため、工学系のメンバーと協議しながら実現することを目指したい。

Ⅳ. その他特記事項

本研究所の直接的な成果ではないものの、プロジェクトの代表者である吉越昭久が編者となって、『災害の地理学』（風間書房）の編集を進めており、この3月中には刊行の予定である。地理学の分野から災害を捉えた論文集である。